第6章

「勇気」へのステップ

●ボランティア活動

福岡県に「紗真秀（しゃしんしゅう）」というグループがある。100人ほどの会員はすべてhideかX JAPANのファンだが、ファンクラブとは違い、今はボランティアグループを標榜（ひょうぼう）している。

主宰は福岡県久留米市の上田早苗さんである。中学生時代「Xファンの上田」として先生たちにも知られていたほどだが、hideが初めてソロツアーを実施した94年4月、九州厚生年金会館でのライブで感動してから1年後に、純粋なファンクラブを立ち上げた。

「私設クラブはなんとなく怖い存在だったんです。じゃあ自分でつくっちゃえって。そのうち、TOSHIがエイズに取り組んで、使用済み切手を集めた人が活用法を知らないというので、回収することになったのがボランティアの始まりです。X JAPANのライブ『青い夜、白い夜』があったとき、初めて東京ドームに行ってチラシを配り、使用済みテレカや切手集めを呼びかけました」

会報を毎月出すようにした。現在は諸事情によってやや下火になっているが、初めライブリポートやリリース情報が中心だった内容は、薬害エイズ問題の川田悦子さんの講演を採録するなど、少しずつボランティアの色彩を帯びるようになる。

「ボランティアはイメージ的に『してあげる』という恩着せがましいところが嫌だったから、日常生活として当たり前にできればいい、と思いました。無理せず、自分たちにできる範囲でやるのがいいでしょ。何をやるにも自由で、一緒に考えようよということです」

その基本姿勢に共鳴して入ってきたのが、福岡県山田市の中村樹里さんだ。

「募金もあれば、労力提供でもいいし、精神的な支えなんかもありますよね。自分を犠牲にせず、自分に合ったことをやるのがボランティアでしょ」

だから、hideの全国ソロツアーがおこなわれたとき、福岡サンパレスの会場周辺でボランティアが募金活動をしているのを見て、上田さんは自然と声をかけていた。

「何か、お手伝いできることありませんか？」

そのときは、開演時間が迫っていたから、翌日は早めに会場に着いて募金箱を腕に抱えた。96年9月13日のことだ。

これが、紗真秀と骨髄バンクとの初めてのつながりだが、そうなってみると骨髄バンクを知っているメンバーが意外に多くいた。福岡市早良区の福地知香さんもそのひとりだ。

「中学生のころ先生方が骨髄バンクの署名活動をやっていました。そのとき、骨髄バンクや骨髄移植について説明を受けたんです。それまでは、骨を取り出すのかと思ってましたけど、内容を聞いてそれなりに知識を得ました」

ボランティア団体の九州骨髄バンク推進連絡会議の会合にも出た。97年6月に福岡市内で開かれた連絡会議主催のシンポジウムには、メンバー10人ほどが参加して知識を深めた。

ただ、骨髄バンクのボランティア活動をやっているからといって、そのままドナー登録には直結しないという。

「親とも話し合ったことがありますが、ドナーには麻酔の危険性というのがあるじゃないですか。それで、親は私のことを心配して『登録するのは自由だけど、私たちは提供を承諾しないよ』って言うんですね。『でも、骨髄移植にはこんないいこと、感動もあるじゃないの』って話しながら、少しずつ理解してもらおうとは思っているところです」

登録年齢に達している福地さんですら、こういう状況なのだ。

「20歳になったら登録したい気持ちはあるんですが、親の承諾が必要というのは、親の理解が得られない私にとっては、イコール登録できないってことです。とても悔しくて悲しいです」

中村さんが言い切った。同じ未成年の上田さんはこう言う。

「うちの親はいいことだ、知ってできることならやったほうがいいと言ってくれます。でも、骨髄移植で何かがあったなんてニュースが出たりすると怖い。私自身、患者さんと適合したとき、じゃお願いしますと言える自信がないんです。それを考えておかないと、登録してはいけないと思います」

そこまで突き詰めるのは、いざ適合しても「辞退」する例が多々あることを知っているからだ。実際に提供に至らない理由としては、最終の健康診断ではねられてしまうケースが最も多いのだが、家族の承諾が得られない場合も確かにある。つまり、上田さんたちは真面目に考えている証拠なのだ。

上田さんは、東京・築地本願寺へ行き、2日間とも献花の行列の中にいた。きちんと見送るため、

香典と数珠を携えた。友人4人が一緒だった。

「ここは私が泣いちゃいけないと、ずいぶん気丈にしてました。帰ってきたら疲れてじゃなくて、放心状態でふらふらでした」

中村さんも行きたかったが、家庭の事情が許さなかった。なぜ行きたかったかを、こう説明する。

「解散のときもそうでしたけど、怖くて、不安でしょうがないんです。ｈｉｄｅだけじゃなくて、私はｈｉｄｅのファンもものすごく好きなんです。東京へ行けば大好きなファンがいっぱいいる、だから行きたい、行って同じ思いのファンたちとｈｉｄｅのそばで、何も話さなくていい、一緒にいたいのに……だけど私は行くことができない。それがとっても悔しかった」

葬儀会場に行ける条件にあるファンが、築地本願寺を取り巻いたのだ。それが、何万という数字になっても、なんの不思議もない。

そう考えれば、テレビのインタビューで「あの子たちの考えていることは、さっぱりわからない」と答えていた大人たちのほうが、とんちんかんだったということになる。

葬儀から帰った上田さんは、アルバイト先の中年社員とこんな会話をした。

「私たちの年代にとってはｈｉｄｅだったけど、みなさんの場合だったら、どの人の葬儀ならあれぐらいの行列をつくりますか？」

しばし考えたあと、この社員が答えた。

「あの人だろうな。その人なら、中・高年のおじさん連中が、本願寺をびっしり埋め尽くすんじゃ

ないだろうか」

あるスポーツ関係者の名前だった。

いわゆる「後追い」もマスコミの話題になったものだが、それを防ぐための条件が、3人の話の中にうかがえる。

「ロックファンじゃない友達がいるんですが、彼女たちが何ひとつ言ってこないのが救いでした。冷たいんじゃないんです。ニュースを聞いて私の顔を思い浮かべたはずだと私にはわかるから、彼女たちの気遣いが時空を超えて伝わってきました」

これは中村さんの印象だ。

「気持ちがわからないわけじゃないんです。でも、もうちょっと落ち着いて考えられたらいい。ほかに目を向けず、hide一筋に人生を費やしていたら、もっとショックを受けたでしょう。ほかにやることあるし、夢もあるから大丈夫でした」

上田さんの夢とは、ボーカリストになることだ。hideが音楽によって勇気を与えてくれたように、自分も音楽によって多くの人々に何ものかを得てもらえればと願っている。

「私も目標があったんですけど、それももうできなくなっちゃったなあって、一時は生きてるのか死んでるのかわからないところにまでいきましたよね。hideのCDジャケットをデザインしたかったんです」

高校、大学と芸術科で学んだ福地さんにとって、それはもはやかなわない夢と化してしまった。

しかし、新たな目標を打ち立てた。気鋭のグラフィックデザイナーを目指すことにしたのだ。

友達や目標、夢といったものを持っていれば、人間はなんとか立ち直れるものなのだろう。それこそ、多くのファンがhideからもらった財産といえるのではないか。

第3章で登場した福岡県宗像市の安井登代子さん（長男の健吾君が、東海大学病院でhideと対面）は、真由子さんの姉・仁美さんが薬科大学へ入るときの身元保証人でもある。

紗真秀の3人と付き合いがあるのは、九州骨髄バンク推進連絡会議のメンバーでもあるからだ。ボランティアとしての安井さんには、連絡会議を含めて〝3つの顔〟がある。

あとのふたつは、九州大学医学部附属病院小児・小児外科親の会「すまいる」、そしてメイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン（MAWJ）福岡支部のスタッフだ。真由子さんがhideと対面できたのが、MAWJの橋渡しによってであることは、健吾君が東海大学病院で移植を受けたときから知っていた。

95年6月に骨髄移植を受けた健吾君は、96年3月に東海大学病院を退院し、1週間後には宗像市の自宅へ帰ってきた。

「MAWJのことを早く知っていたら、うちも健吾の夢をかなえさせてやりたかったですね」

発病するまでは、サッカーのレギュラー選手だった健吾君が、もし夢をかなえるとしたら、カズかラモスとの対面だろう。

安井さんが、ＭＡＷＪに熱を入れるようになったのは、97年夏からだ。

「東海大学病院にいたころ、『これは九州にも伝えなければ』と思ったのですが、帰ってきても健吾のＧＶＨＤが激しくて、大量の薬を使い、その副作用で多くの余病を抱えたため、ボランティアに取り組むのは無理だと思っていました」

それが、にわかに現実味を帯びたのは、健吾君の〝闘病仲間〟である10歳のＫ君の体調が急変してからだ。

「何かをしてやりたい。息子の笑顔が見たいんです」

安井さんにＭＡＷＪのことを教えられたＫ君のお母さんは、すぐに申し込んだ。〝緊急ウィッシュ〟の扱いとなって、夢の実現に向けて準備が始まった。しかし、すでに体を病室から出すこともできない状態で、間もなくＫ君は逝った。Ｋ君の夢を聞いた安井さんは、大きなショックを受けた。

「お母さんがつくったニラ玉が食べたい……」

実現に時間がかかる有名人との対面と違って、すぐにでも可能になる。だが、そんなＫ君のささやかな願いすらかなえることができなかった。

「メイク・ア・ウィッシュにもっと早くからかかわっていれば……。それに、ただ存在を伝えているだけではダメなんだ。行動しなければ、なんにもならない！」

さっそく東京の本部でトレーニングを受けていたら、福岡県糟屋郡の松村雄市君から申し込みがあった。母の美由紀さんとは前からの知り合いだが、つづいて女児患者からの申し込みがあり、早

くもふたりの夢の実現に向けて動き出すことになったのだ。

こうして、97年11月にＭＡＷＪの福岡支部が立ち上がったのだ。事務所は福岡市の中心部にある保険会社が、オフィスの一角の机と電話を提供してくれた。安井さんは週に2回、支部に通っているが、すでに九州地区で6人の子どもの夢をかなえている。

東京ディズニーランド見学が半数を占めるが、対面ではピカチュウがあった。ピカチュウは交渉中の97年12月に、テレビを見ていた子どもたちが倒れる〝事件〟があったりしたが、難問だったのは着ぐるみの運搬だった。美術品扱いなので、片道で40万円もかかるという。最終的には運送会社が負担してくれて大助かりだった。

変わったところでは、「福岡ダイエーホークスの一員となってプレイしたい」という夢が神経芽細胞腫の小学校2年生から寄せられた。福岡市東区の冨永太朗君で、球団の理解が得られて5月13日の対日本ハム戦の始球式で投げることができた。真新しいユニホームの背番号は、太朗君が大好きな秋山幸二選手と同じ「1」で、肩ならしのキャッチボールでは、秋山選手がキャッチャー役を務めた。

そうした夢の実現がつづいているせいか、ボランティア登録もすでに１２０人ほどになり、50人がいつでも稼働できる。

「九州での必要経費は、九州の中で集めましょうよ」

ＭＡＷＪの活動資金はすべて寄付によってまかなわれているが、福岡市内で5月末の日曜に街頭

募金をしたところ、3時間で24万円が集まった。

ところで、宗像市では4月25日から26日にかけて、「24時間EKIDEN」が開催された。24時間以内に1周850メートルのジョギングコースを、何周できるかを競う駅伝で、「骨髄バンクチーム」も出場した。この中に健吾君と雄市君が含まれ、ともに骨髄移植を経て元気になったふたりのたすきリレーには、応援席から盛んな拍手が送られた。

●ボランティア団体の立ち上げ

hideの歌声によって、人間不信から立ち直った女子高校生がいる。親は、娘に励まされながら骨髄バンクのボランティア団体の立ち上げに協力した……。鳥取県倉吉市の安長章さんと祐子さんだ。

祐子さんがhideと出会ったのは小学校6年のときだった。中学に入ってから、両親の大きな期待に押しつぶされそうなことが、ずいぶんあった。それに応えようとしたが、プレッシャーはかなり大きかった。次第に、勉強そのものが嫌になってくる。そうすると、学校へ行くのがつらくなる。家にいるのも息苦しい。

「居場所がないって、そんな感じでした。唯一、慰めてくれたのがX JAPANの曲であり、hideさんの存在だったんです」

大きな転機になったのは、96年8月にhideがドナー登録をしたことだ。

「骨髄バンクの存在は知っていましたが、興味を感じていませんでした。hideが登録したと聞いて、改めてテレビなどを見ていて、苦しんでいる方がこんなにもいるのかと知って、hideと同じように何かをしたいと思いました」

折から、鳥取県内では骨髄バンクのボランティア団体を旗揚げさせる準備が進んでいた。偶然ながら、そこに父の章さんがかかわっていたのである。祐子さんは中学3年になっていた。

きっかけは、92年10月に米子市役所の30歳になる女性職員が急性リンパ性白血病になったことだ。職員組合が立ち上がった。

組合が検討したところ、骨髄バンクのドナー登録者を増やすことが最短の道という結論になり、94年3月と96年6月にシンポジウムを開いた。きっかけとなった女性職員は、残念ながらドナーが見いだせないまま力尽きたが、2回目のシンポジウムでは米子商工会議所青年部が共催団体に加わって、〝異色〟の取り組みとなった。

97年12月に自治労鳥取県本部主催で第3回シンポジウムが開かれたが、これはボランティア団体の設立へ向けての具体的な立ち上げを目標にしていた。何度かの準備会を経て「鳥取県骨髄バンクを支援する会」が設立総会を開いたのは、98年5月30日だった。

祐子さんは、それまでのいきさつから、それなりのボランティア活動をしようと考えてはいたが、hideの死によってより積極的な意志を持ち始めた。

しかし、5月2日はそれどころではなかった。明かりを消した自室から出ようとせず、ずっと泣いていた。頭の中は、すべてｈｉｄｅで占められていた。連休中だから5日まで学校はない。ひたすら自室にこもっていた。葬儀日程を知って、決めた。

「行こう、東京へ行こう。ｈｉｄｅのおまいりをしよう」

両親の前で正座をした祐子さんは、きっちり両手をそろえて深々と頭を下げた。腕組みしながら黙考した末、章さんは決心した。

「よし、行っておいで。ただし7日だけだ。6日は学校へ行きなさい」

内心は大いなる不安でいっぱいだった。高校に進学するとき、家族でバリ島に旅行したことはあるが、祐子さんは東京へ出たことがない。そんな娘を、たったひとりで東京へなど出して大丈夫だろうか？

だが、祐子さんを信用することにした。それに、参列することで元気になってくれれば、そのほうがいいと考えたのだ。6日に、章さんは自ら学校へ電話をかけた。

「祐子をかわいがってくれた東京の叔父が亡くなりましたので、葬儀に参列させます。済みませんが、7日は休ませていただきます」

もともと、ｈｉｄｅのファンであることに、章さんは理解を示していた。今は自治労鳥取県本部の書記長を務めている章さんには、〝お堅い〟イメージがつきまとうが、考え方はずいぶん柔軟性に富んでいる。

「だって、若いころを振り返ってみればいいんです。髪の毛にしても、ボクらの高校生時代は長髪ですよ。ビートルズが全盛の時代ですから、マッシュルームカットなんかもありましたよね。今は、それを染めているだけの話じゃないですか。昔、自分たちがやってたことを忘れている親が多過ぎませんか？　だから、ファンの気持ちはすごくよくわかるんです。逆に、理解しようとしない大人のほうがおかしいと思いますよ」

その章さんは現在、祐子さんが使っていた部屋で寝起きしている。壁一面、ｈｉｄｅやＸ　ＪＡＰＡＮのポスターだらけだ。

5月6日、祐子さんはクラスメート3人に東京行きを伝え、授業をきちんと受けてから、寝台特急「出雲2号」に乗った。東京駅に着いたのは7日午前6時27分だ。そのまま築地本願寺に駆けつけたが、すでに行列ができていた。

6時間並んだあと、祐子さんはようやく献花できた。そのまま、築地本願寺の正門前近くにたたずみ、ｈｉｄｅの出棺を待った。

手に持っていた章さんの携帯電話で、自宅に電話をかけている最中、霊柩車が正門を出てきた。

「今、ｈｉｄｅが……」

そう言ったきり、祐子さんは言葉を失っていた。自宅では、受話器を持ったままの章さんが、携帯電話から流れてくる悲鳴や泣き声をじっと聞いている。視線はテレビに釘付けになっていた。

とんぼ帰りしなければならない祐子さんは、午後6時34分発の寝台特急「出雲1号」の人となっ

た。興奮状態がつづき、初めての寝台列車とも相まって、ほとんど眠れなかった。8日午前5時ごろ、ポケットベルに入電があった。

「鳥取駅で待つ」

東京行きを伝えておいた友人のひとりだ。祐子さんの自宅は鳥取駅からさらに20分走った倉吉駅だが、5時25分に特急が鳥取駅に滑り込むと、祐子さんはそのままホームに降り立った。

「祐子、ひとりっきりにしておいて、ごめんね。私、一緒に行けなくて。無事に帰ってきて、よかった……。よかった、よね」

祐子さんは、声にならなかった。学校では、みんな表面的な付き合いだと思っていた。自分もひとりだけだと感じていた。

(私のこと、こんなにも心配してくれてた友達がいたんだ)

もう、ひとりじゃない。居場所だって、ちゃんとあるんだ。ひとりだけだなんて思い込んで、私がバカだったわ……。

この経験を、祐子さんはｈｉｄｅがくれた貴重な宝物だと思っている。ｈｉｄｅという存在がなければ、こんな友人を持つことはなかっただろうと。

祐子さんは、自信を取り戻しつつある。献花を終えておよそ3週間後に、鳥取のボランティア団体が立ち上がったが、発足時の16人のメンバーの中で、高校生は祐子さんひとりだ。

「後追いなんかするよりも、ｈｉｄｅのやろうとしたことを受け継いでいくほうが、ｈｉｄｅは本当に喜ぶはず」

●遺志を継いだギタリスト

ｈｉｄｅの急逝によって「遺志を継ぎたい」と決心し、すぐ骨髄バンクにドナー登録したバンド仲間がいる。ＫＩＹＯＳＨＩさんだ。

１９８５年ごろ、ｈｉｄｅはサーベルタイガーを率いてライブハウス「エクスプロージョン」で活動した。ＫＩＹＯＳＨＩさんもジュエリルのギタリストとして出演していた。そのころは、互いに顔がわかるくらいで、言葉は交わさなかった。

Ｘ　ＪＡＰＡＮの前身である「Ｘ」が結成されたのは82年だが、ｈｉｄｅを加えて本格活動を開始したのは87年2月だ。Ｘは初のアルバム『ＶＡＮＩＳＨＩＮＧ　ＶＩＳＩＯＮ』を88年4月に出す。このとき発売元となったエクスタシー・レコード主催のイベント・エクスタシーサミットで数年ぶりの再会となった。

ところが、ＫＩＹＯＳＨＩさんの風貌が全く変わっていて、ｈｉｄｅは気づかないままＫＩＹＯＳＨＩさんの演奏ぶりを眺めていた。

「オイ、あのギターの子、一体だれだ？」

ＫＩＹＯＳＨＩさんとわかって、「なんだ。子じゃねえや！　ＫＩＹＯＳＨＩじゃんか」。それか

らの付き合いになる。
「ちょうど10年ということになりますか。それからは、喧嘩珍道中の連続でした。殴り合いの喧嘩だけで3回はやりましたからね。酒が入るとふたりとも、なんだかわけがわかんないまま喧嘩を始めちゃうんですよ」
わけがわからないうちに、アルコール入りでの喧嘩だから、翌日に正気に戻ってもｈｉｄｅは何も覚えていない。
「オレ、何かしたっけ？」
それがまた憎めない。94年3月から4月にかけて、ｈｉｄｅの初めてのソロツアーがあった。全国12回の公演で、ｈｉｄｅファンが急増する契機ともなったライブだ。しかし、バックバンドにＫＩＹＯＳＨＩさんの姿はなかった。
「ソロやるからギター弾いてくれないか」
ツアーが始まる前に、ｈｉｄｅからそう頼まれてＫＩＹＯＳＨＩさんは引き受けた。ところが、その日、さっそく祝宴となったのはいいのだが、そこでまた大喧嘩となり、ＫＩＹＯＳＨＩさんの起用は立ち消えになってしまったのだ。
次のソロツアーは、本書でたびたび登場した募金活動を伴った96年秋だ。やはり事前にｈｉｄｅが電話をかけてきた。
「またソロツアーやるから、今度こそ頼むよ。喧嘩はもうしないと思うからさ」

2カ月近く、全国を巡るのだから、これを機にふたりの間柄は以前に増して親しみを深めた。ＫＩＹＯＳＨＩさんも20回の公演を無事務め上げた。
「波長が合うというか、一緒にいてとにかく楽しいんですよ」
ふたりとも自宅が近く、ツアーが終わってからは2日おきぐらいに会っていた。たいていは、ｈｉｄｅがＫＩＹＯＳＨＩさんの家の前まで車でやってきて、いきなり電話をかけてくる。
「あと5分で出てくんだぞ」
そんなことが、しょっちゅうだった。
「なんだか、ガキのころから一緒だったような感じがしてました。あいつ強引だから、寝ててもなんでもこんな調子でしたね。そういう、子どもが遊ぼうよと誘いに来るのと変わらないような付き合いでした」
97年の大晦日に、東京ドームでのラストコンサートと、ＮＨＫの紅白歌合戦への出場で、ＸＪＡＰＡＮは解散した。
これを機に「hide with Spread Beaver」が結成され、ＫＩＹＯＳＨＩさんら6人が加わった。全員がソロ活動ができ、それぞれにバンドを持っている。そのため「日本一忙しいバンド」の異名をとった。
5月1日にもテレビ番組の収録があった。ＫＩＹＯＳＨＩさんも一緒だ。午後11時ごろに収録を終え、港区内に繰り出した。いつものパターンである。夏の全国ツアーの話でずいぶん盛り上がっ

た。
日付は2日に変わり、午前6時ごろにはお開きとなった。KIYOSHIさんの記憶では、そんなには飲んでいなかったという。
「hideは時差ボケがけっこう厳しいんですよ。それもあったかもしれませんね。でも、ツアーは絶対やるつもりでいました」
翌日が休みのKIYOSHIさんはぐっすり眠り込んでいた。電話の呼び出し音が鳴る。寝ぼけた状態で受話器をとった。
「hideさんが亡くなったって、テレビで言っているんですけど……」
ファンのいたずら電話としか思えなかった。いたずらは、これまでも結構あった。
「何言ってんだ、お前っ！」
たたきつけるように電話を切ったが、それから眠れなくなってしまった。事務所に確認したら、hideの死はまぎれもなかった。
「現実を受け止めて、少しでもこのつらさを癒すために、何かできないだろうか」
考えた末にたどり着いたのが、骨髄バンクへのドナー登録だった。5月20日に都内の骨髄データセンターへ赴いた。説明ビデオを見ながら、hideの言葉が蘇る。
「骨髄液の採取って、痛えんだぞ」
あいつが言ってたことって、こういうことなのか……。しかし、実際の骨髄液採取は全身麻酔を

かけられているから、そのときの痛みは感じないで済む。それを経験しないままhideは逝ってしまったのだから、遺志を継ぐ自分はぜひとも患者に提供したい。
「だから、真っ先に考えたとき、『hideの遺志を継ぐ』というほど立派なものじゃなかったんです。自分自身への癒しを考えると、すぐにでも登録するのが一番かなと……」
それまでも、骨髄バンクのことはhideからよく聞かされていた。行動に移れなかったのは、自分の周りが切迫していなかったからだ。ドナーを求める患者もいなかった。
「それに、単に認識不足ということもあったんですね」
ロックオペラ『ハムレット』の公演が近づいていた。KIYOSHIさんは音楽監督としてかかわっている。東京・中野サンプラザの20周年記念公演として、5月29日に開幕する。ドナー登録したことを何げなく話していたら、プロデューサーの草刈清子さんが言葉を挟んだ。
「それって、すごくいいことだから、もっと大きくやるべきよ。スタッフのみんなに呼びかけて、さらに外へ向けて活動しようよ」
KIYOSHIさんは迷った。hideが登録したあと、一部のマスコミに「売名行為か」などと言われて、ひどく落ち込んだ姿を間近で見ているからだ。
「あいつが苦い顔をするときって、すぐにわかるんです。すごく敏感になってましたね」
草刈さんは言葉を重ねた。
「いいことやるのに、躊躇してはダメ。とにかく、やりなさい。いいことをやるときには、自信を

持ちなさいよ」

ＫＩＹＯＳＨＩさんは登録したときに見たビデオを、改めて思い出した。日本では登録者が少ない。待っている患者が大勢いる。少しでも提供者が増えるなら、自分だけのことを考えていてはいけないだろう……。

「わかりました。それでは、このロックオペラの中でやりましょう」

ただ、なにぶんにも骨髄バンクやボランティアについての知識があまりない。骨髄移植推進財団に連絡をとり、やって来た庶務経理部長の矢澤俊昭さんから説明を受けた。

「ドナー登録だけではなく、募金活動もあります。財団としてはいくらでも協力します」

それなら、やりようはいくらでもある。

「登録者をひとりでも多く増やすことをやりましょう」

こうして『ハムレット』の会場で、財団のパンフレット『チャンス』を配布することにした。次のような、ＫＩＹＯＳＨＩさんのメッセージも封筒の中に入れた。

〈ｈｉｄｅの死からまもなく1カ月がたとうとしています。

音楽活動を一緒にやってきた、親友のｈｉｄｅが一人の個人として熱心に取り組んできた活動に『骨髄移植推進事業（骨髄バンク）』があります。

白血病等血液難病に骨髄移植が有効な治療法だということは知っていましたが、ボクもドナー登録をするまで知らなかったことがあります。

自分でできることとして『骨髄移植推進活動』に取り組もうと思っています。（中略）

ロックオペラ『ハムレット』を通じて一人でも多くの人が『骨髄移植推進事業』を理解していただき、少しでも貢献できればと思っています〉

さらに、幕間の休憩時間に、ＫＩＹＯＳＨＩさんが協力を呼びかけるテープを流し、募金箱を置いた。

5月29日から6月7日まで東京、6月14日に大阪で計16回の公演をこなしたが、3万２０００部の『チャンス』を配布したことになり、その後しばらくして東京地区では若い人の登録が増えたという。募金も１００万円近く寄せられた。

「パンフレットの入った封筒を、だれひとりとして捨てていかなかったんです」

矢澤さんは、それがうれしいと破顔した。

「ボクもそんなにしょっちゅうライブやっているわけではないので、とりあえずはｈｉｄｅがやろうとしていたSpread Beaverのツアーで、同じように呼びかけていきたいですね」

忙しいＫＩＹＯＳＨＩさんだが、もし適合患者が見つかったら、必ず提供する決意を固めている。

「絶対、やります。そのために登録したんですから。スケジュールを全部とばしてもやります。それをやらなければ、ドナー登録をした意味がないですよ」

6月14日の大阪公演には、真由子さんがやってきた。ＫＩＹＯＳＨＩさんは真由子さんのためにｈｉｄｅが愛用していたギターを使った。

翌日、和歌山まで足を延ばしたKIYOSHIさんは、真由子さんの自宅で真由子さんらと語り合った。96年秋のツアーでほんの少し声をかけたことはあったが、hideの葬儀のあとは頻繁にファクスを交わし始めていたのだ。

「これ、みんなSpread Beaverのメンバーの名前が付けてあるの」

自室に置いてある水槽の中で泳ぐ金魚を指さしながら、真由子さんが説明した。

「夏には、海に連れてってよ」

真由子さんの自宅からすぐのところに、紀淡海峡を望む天然の砂浜が広がっている。KIYOSHIさんはそこに真由子さんと遊びに行くことを楽しみにしている。

●鎮魂のメッセージ

テレビリポーターの東海林のり子さんがX JAPANと付き合い始めたのは、TOSHIがパーソナリティーを務めていたラジオ番組にゲストとして招かれてからだ。90年10月のことだった。

「お招きいただいたのはいいんですが、X JAPANって知らなかったんです。聞けばド派手なバンドだということで、ジャケット写真を見たらそのとおりなんですね。でも、ラジオ番組ですから、会ったら礼儀正しくおとなしい普通の青年でした。TOSHIさんが『1年間ライブしないまま、ファンを待たせているんです』と言ってましたから、私のワイドショーでX JAPANを紹介できないだろうかと考えたんです」

東海林さんはフジテレビ系列の「おはようナイスデイ」に出演していたから、企画を出してみたらあっさりOKとなったのだ。

「それまで、ワイドショーがロックを取り上げるなんてことはなかったんです。番組のターゲットは奥様方ですからね」

だが、意外な反響があった。すでに紹介した富山県の藤井智子さんは、東海林さんのリポートを見てX JAPANのファンになったし、親子の距離を縮めてくれるきっかけになったという手紙なども舞い込んだからだ。東海林さんは初めてX JAPANの番組を収録したとき、「なぜ化粧を?」と尋ねた。

「アメリカでは、KISSもそうならファンも同じいでたちですよ。それに、ステージでは、見た目でもインパクトを出せば、曲とともにダブル・インパクトになるじゃないですか」

妙に納得してしまった東海林さんだが、X JAPANが初めてNHKの紅白歌合戦に出場したときこそは、奇抜な答えが出ると思い込んでいた。

「うれしいですよ、これで親孝行ができたかなって感じです」

東海林さんは〝斜に構えた〟反応を想像していたが、意外な感想が返ってきたのだ。

(とっても親孝行で、普通の子たちと変わらないじゃないの。こちらが構えていなければ、話が通じるな)

そう感じてから、密着取材が本格化した。フィルム・コンサート用の撮影のためにメンバーがロサンゼルスへ行ったときには、東海林さんも同行するほどだった。国内でのコンサートでも、メンバーの親孝行ぶりを目にした。親族が大勢やって来るのである。ｈｉｄｅの両親や弟の裕士さんも、頻繁に楽屋を訪れた。

あるとき、ｈｉｄｅがポツリとつぶやいた。

「ファンから送られてきた手紙をロスで読むと、感じ方が違うんですよ。向こうだと、なんだか落ち着けて内容に集中できるのか、ファンの気持ちがじかに伝わってくるんです。ジーンときたりすることも、結構ありますよ」

ｈｉｄｅは『Ｘ－ＰＲＥＳＳ』というファンクラブ誌の編集も担当していた。そのため、ファンレターを読む機会は多かったにちがいないが、東海林さんは「本当に手紙やＥメールをきちんと読んでるな」と直感した。

「ファンとの距離がそこいらへんから近くなったんじゃないでしょうか。表に出てこない様々なことが、ファンとｈｉｄｅさんのあいだにあったと思いますね。ですから、亡くなってからファンの女の子に取材したら、そういう話がいっぱい出てくるんです」

東海林さんが実際に取材したファンは、こんなことを語った。

「私、看護婦になりたかったんです。それで国家試験に合格したら、『よかったね』って返事をもらって、すごく感激しました」

そうした実例は、真由子さんへのＥメールをはじめ、これまでに紹介してきたとおりだ。

「だから、私たちが想像する以上にファンとのすごい接点を、ｈｉｄｅさんは持っていたと思います。ファンは、その優しさが本能的にわかるんですよ、きっと。それが、葬儀でのあれだけの人数につながったんじゃないでしょうか」

ｈｉｄｅの「ファン思い」は、これも何度か紹介した。その〝原点〟とも考えられることを、東海林さんはｈｉｄｅから聞いたことがある。

「中学生のとき、同級生の家でＫＩＳＳのジャケットを初めて見て、『なんだこりゃ』って思って聴いたらすごくいいんです。すぐファンクラブに入ることにして……」

ところが、申し込みからずいぶん日が経つのに会員証が送られてこない。〝秀人少年〟は、郵便受けの前で配達の局員を待ちわびる日々を重ねた。まるで、ラブレターの到着をワクワクしながら待つ〝恋する青年〟のように。

「人に優しいｈｉｄｅさんは、もともと性格的にそれを持っていたと思うんですが、ファンに対する優しさというのは、自分がＫＩＳＳのファンだったころの気持ちを忘れなかったからではないでしょうか。いつ会員証が届くかと待ちつづけていた気持ちを忘れず、慕ってくるファンにそのまま自分自身を当てはめていたように思いますね」

人には優しかったｈｉｄｅも、我がことになると照れ屋だった。それをよく承知している東海林さんだけに、真由子さんとの対面を知ったとき、プロのリポーターらしい印象を持った。

「私は、取材する立場のことを考えました。もし仕事を渡されても、取材しなかっただろうなって思いましたね」

だから、ドナー登録を済ませたｈｉｄｅにこう言った。

「ｈｉｄｅちゃん、照れるだろうと思ったから、行かなかったわよ」

ｈｉｄｅもあっさり答えた。

「うん、それでいいよ」

記者会見の模様をビデオで見ながら、ぼそぼそとしゃべっているｈｉｄｅのシャイな様子が、今の東海林さんには「優しさの見事な体現」に思えてならない。

「変な言い方ですが、葬儀にしてもｈｉｄｅさんは『もう少し、おとなしめにやってくれよな』って言ってるような気がして仕方なかったんです。それにしても、若いロッカーたちがよくもあれほど築地本願寺に集まってきましたよね」

そうなる理由を、東海林さんは思い出していた。葬儀の席で、ゼペットストアのメンバーを見かけて、ｈｉｄｅとの会話が蘇ったからである。ゼペットストアはｈｉｄｅが見いだしたバンドで、そのきっかけを尋ねたときのことだ。

「いやあ、事務所にテープが転がってたんですよ。ジャケットが妙にしゃれてたから、家に持ち帰って聴いてみました。そしたら、『なんだこりゃ』でしたね」

「なんだこりゃ」は、ｈｉｄｅが発する最高の賛辞である。

「もし、ボクが見つけず世の中に出てなかったら、ビートルズを見いだせなかったのと同じくらいに後悔するんじゃないかと思ったほど、いいものでした。彼らは天才ですよ。東海林さん、絶対ライブに聴きに行ってやってね」

ファンに優しいｈｉｄｅは、後続のバンドにも目をかけていた。東海林さんがいろんなライブに出かけると、そこにｈｉｄｅが来ていることが結構あった。

「若いロッカーにｈｉｄｅさんが好かれるのは、そんなところがあるからかなって思いますね。解散したあともそうでした。普通なら、自分のことだけを考えるでしょうに、いいバンドが埋もれたままになるんじゃないかって、それをとても心配してましたね。遠慮がちに隅っこのほうに立ってた姿が、今もくっきり目に浮かびます」

東海林さんは、ｈｉｄｅの次の言葉を守っていこうと決意している。

「元Ｘ　ＪＡＰＡＮの……って盛んに言われるけど、『元』は嫌なんですよ。東海林さんは、『元』なんて使わないでくださいね」

西暦２０００年までには、再びＸ　ＪＡＰＡＮの活動を始めようと、ＹＯＳＨＩＫＩと約束しあっていた。それを正式に表明できないもどかしさが、形を変えてこうした表現になったはずである。

『Ｘ　ＪＡＰＡＮ』は〝永遠に不滅〟なのだ。

ミュージシャンでプロデューサーの小室哲哉さんは、ＹＯＳＨＩＫＩを通じてｈｉｄｅと知り合

った。まだ「X」と名乗っていた10年前のことで、YOSHIKIのほうから声をかけられたのだ。90年2月には日本武道館でのコンサートに誘われた。

ドラムのYOSHIKIとギターのhideが、ずいぶん目立った。

(Xを引っ張ってるのは、このふたりだな。ファッションセンスを含めて……)

それから交流がつづいていくのだが、ふたりは初めから小室さんをこう呼んだ。

「小室クン」

小室さんのデビューはXの本格始動より3年早い84年で、年齢も小室さんのほうが5〜6歳上だが、小室さんも違和感なく受け入れた。先輩・後輩といった間柄でもないため、呼び捨てやさん付けというわけにもいかず、いわば友人同士といった形で、自然にそうなっていたからだ。

ロサンゼルスにも事務所を構えている小室さんは、たまに街角でhideに出会うことがあった。そんなときは立ち話をしたが、日本国内では音楽番組の収録など、仕事の現場がほとんどだった。

(けっこう恥ずかしがり屋なんだなあ)

対面してのhideは、そんなイメージを抱かせた。むしろ、YOSHIKIに聞かされるhideの話のほうが多く、どちらかといえば小室さんの頭には、それによるhide像が出来上がっていた。

「Xのことを一番考えてくれているのは、hideですね。とにかく、いろいろ頭を使ってくれるんですよ」

YOSHIKIから、この話が何度も出た。そうしたとき、話題は必ず真面目でしんみりした雰囲気のことが多かった。それだけhideの存在が大きいのだろうと、そのつど思った小室さんの頭には、物事を理知的に考えるhideのイメージが定着していった。

真由子さんとの交流も、スッと胸に溶け込むし、hideの気持ちが痛いほどよくわかった。それは、小室さん自身が、何人かの患者を病院に見舞った経験があるからでもある。

「病気の種類は違っても、音楽を支えにして頑張っている患者さんの生き方は同じなんです。ボクが作った音が支えになったり、生命力を保ちつづけたりといった患者さんを見ていましたからね。自分の生き方、生活感を音楽とどれだけ重ね合わせていけるか、それを病気の方にも理解していただけることで、見えてくるものがあるんです。hideの場合は自分の音楽と、やらなければならないことと、ちょうど重なったのが、真由子さんなのかなと思いましたね」

それだけに、今回の急逝が〝自殺〟だとは考えられない。

「生活していくことが大変だというのは、hideの中にもあったでしょう。でも、自殺だったらとても理解できません。なぜって、筋を通すことを大切にしていたhideが自殺だと、それが逆転してしまって、筋を通すのを放棄したことになってしまいますから」

そんなところにも、いわゆる〝世の大人たち〟に本当のところまで理解してもらえない部分として立ちあらわれているのかなと、小室さんは思う。

「X JAPANの音楽は、ボクらの世代には考えられないくらい、のめり込んでいるというか気

合があるというか、こうと思ったら曲げずにとことん行くようなところがあるんです。ボクらの世代だとスポーツに向かったりするのが、それを音楽の世界で生み出したのはＸ　ＪＡＰＡＮが初めてではないでしょうか」

だから、化粧を施し髪の毛を染める外見だけだと、〝凶暴性〟を秘めているように見られがちだが、それは違うという。

「バンドというと不良性とか暴走しているイメージとかがつきまといますが、どちらかといえばスポーツ選手みたいな思いきりのよさを持っていましたから、非常に健康的なものがありました。ＸＪＡＰＡＮを『よくわからない』って切り捨ててしまうと、何も始まらないというくらい前向きで、生き方はすごく肯定的でした。今の世代を語ろうとすれば、少なくとも理解しないとボクは困ると思うんです。彼らには、破壊や破滅といったイメージもありましたし、それはボクも精神的に持っているんですが、何か新しいことを始めるときに、前にあったものを壊していく精神と通じているのではありませんか。表現は自由でいいと思うんです。精神的にどういうことをやっていたかはわかってあげたいんです」

小室さんは、「彼らは前向き」「理解できないと困る」「理解してほしい」という言葉を何度も繰り返した。

5月6日の通夜では、ＹＯＳＨＩＫＩのほうから話しかけてきた。

「ｈｉｄｅがいなくなっちゃって、これからどうしよう……」

がっくりした様子のＹＯＳＨＩＫＩを前に、小室さん自身も大きな存在を失ったと改めて感じた。これまでは、ｈｉｄｅとＹＯＳＨＩＫＩ、ＹＯＳＨＩＫＩと自分というつながりはあったが、「ｈｉｄｅと小室哲哉」という線はそう太くはなかった。

（ｈｉｄｅは、小室哲哉をどんなふうに見ていたのだろう……）

通夜の席で追想しながら、その後の音楽番組で演奏しながら、しきりとそればかりを考えつづけていた。ＹＯＳＨＩＫＩとの交流の延長線上には、いつか必ず本人から伝えられるだろうと思うのが当然だった……。ついに、聞きそびれてしまった。

（でも、考えるくらいなら、言葉に出しておけばよかった）

それが、唯一の心残りとなっている。だからこそ、通夜の席でＹＯＳＨＩＫＩの提案をすぐ受け入れた。

「小室クン、ｈｉｄｅの追悼コンサートをやろうよ」

多言は必要なかった。ｈｉｄｅの遺志を継ぎ、チャリティーで開催することも、その場で決まった。

通夜の席では、もうひとつ内心に期するものがあった。控え室で、全国骨髄バンク推進連絡協議会の海部幸世会長と、ライオンズ日本財団の加藤正見理事長から、ｈｉｄｅの骨髄バンクへのかかわりを聞かされたのだ。

「小室さんも、協力してくださいな」

海部会長に持ちかけられ、即答できなかったのは、とにかく毎日が猛烈に忙しいからだ。協力するなら無責任な対応はしたくない。骨髄バンクについての知識も蓄えておきたい。少なくとも、「いえ、ボクにはできません」と否定の言葉が出なかったのは、そうした背景があったためである。

それに、超多忙なスケジュールをこなしているとはいえ、小室さんは麻薬・覚醒剤撲滅運動やユニセフ（国連児童基金）にかかわっていて、社会活動と無縁ではない。

「好きな仕事がやれて、その点で恵まれているのは確かです。そういうとき、不自由な思いをしていらっしゃる方に手を差し伸べたい、という気持ちはもちろんあります。今までは、ボクなんかがしゃしゃり出なくても、ｈｉｄｅに任せておけばいいという面がありましたが、ｈｉｄｅの活動を引き継いで広めたいとは思います」

実は、かつて小室さんの周りに白血病患者が相次いだことがあり、何カ所かの病院を訪れる機会があった。

「ｈｉｄｅもそうだったように、自分の音楽とかかわっている身近な人と病気でつながるというのは、大きなものがあると思います。音楽をやっていなければ、こういう機会には絶対に出会えなかったでしょう。知り合いのまた知り合いというだけでなく、知り合いをつないでいるものとして音楽があることを大事にしたいんです。なんでもそうだと思いますが、協力するときや何かを手伝うときに、言葉の裏にウソがなくて同じことが言えるほうが説得力があるでしょ。それを見つけたいと思っているんです」

ＫＩＹＯＳＨＩさんが、ドナー登録によってｈｉｄｅの遺志を継いだのとは違った形になるだろうが、小室さんもまた音楽活動を通じて骨髄バンクへの協力に乗り出したいという。

真由子さんとｈｉｄｅの交流が始まるきっかけとなったメイク・ア・ウィッシュにも、小室さんに対面したいというウィッシュ・チャイルドがいれば、スケジュールを調整して協力するつもりでいる。

ｈｉｄｅがまいたタネは、次々と花開こうとしている。その花が、新たなタネを生んでいくにちがいない。